

きつねのおきやくさまに見る援助論

—児童文学を媒介とする援助論教育の試み—

小山 聡子

A Lecture of Introduction to Helping Profession using “Kitsune-no-Okyakusama”
(Juvenile Literature)

Satoko Oyama

援助論教育のより良い授業を目指すために、筆者が手ごたえを感じたある導入教育の授業を振り返り、自己評価した。「一人の全体」としての筆者に多大な影響を与える子育て及び、障害児者福祉の実践現場における経験の両者を通じて体感した援助関係の妙味を、児童文学をメタファーとして伝える試みであった。結果、援助活動において、カウンセリング・マインドとシステム論的思考を体得することの重要性と対人援助職の魅力を伝えることに一定程度の効果があったと考えられる。一方、メタファーの使用は、それが具体的で「面白い」ものであるだけに「何を」「何に」見立てるのかの厳密な説明と、さらに実際の援助事例による補強が必要であることがわかった。また、世界の多層性を子どもの目を通し、おとなの表現力で伝える児童文学の持つ力は援助論教育の場でも有効なものと考えられた。

キーワード：援助論教育、カウンセリング・マインド、システム論、児童文学、メタファー思考

1. はじめに

大学の社会福祉学科で援助技術演習や実習を担当する中で、特に初心者向けの、やってみて面白く、聞いて面白い授業の工夫を重ねている。学生を社会福祉現場実習に送り出すにあたって、2年次におかれた「社会福祉援助技術演習」という授業で、面接技術のロールプレイを指導して特に感じることもある。それは、相手を共感的に理解する「カウンセリング・マインド」を体得することの重要性、そして、一対一の面接技術のみならず、援助者としての自らをも全体システムの一部ととらえた援助関係のシステム論的理解をはかることの重要性である。これらの観点を同時に伝え、かつ、

対人援助職の魅力を感じてもらえるような導入教育はないだろうか。そこで、筆者自身が1人の生活者として取り組んでいる重要な活動の1つである「子育て」を通じて出会った児童文学をメタファーとして取り上げたところ、学生からの確かな手ごたえを感じた。これは、例え話を使ってわかりやすかった、興味深かったなどの感想が圧倒的に多かったということである。我々の生活にメタファーは深く浸透しており、その探求を通じて「人間的な意味の形成の問題」に対峙できるという見解もある。¹⁾メタファーは、抽象的思考対象について語ろうとしたときに必須のものといえるだけに教育における使い方に間違いは許されない。

「援助論教育の方法」という「場」で児童文学、カウンセリング・マインド、そして援助のシステム論思考を統合する試みは成功したのだろうか。より良い授業を作るためには何に留意すれば良いのだろうか。

2 方法と目的

(1) 方法

多くの大学でそうするように、わが社会福祉学科の1年生を対象とする基礎演習という必修科目では、各教員が1回ずつ担当分野の紹介をしている。2000年、2001年の前期に各1回ずつ上記のテーマで基礎演習に取り組んだので、まず、その授業の構成と内容を振り返って整理する。材料として取り上げた作品は、あまんきみこによる「きつねのおきゃくさま」である。次に、感想と意見を記すように伝えて、授業の1週間後に学生から回収したペーパー（日本女子大のB5版解答用紙表裏、計173名分）を仔細に検討し、第一に、設定した問題への回答内容（授業時間中に記載したもの）、第二に、教員が意図した諸項目の伝わり度合いを読み取り、自己評価を試みる。

(2) 目的

より良い援助論教育²⁾の授業作りに資することである。そして、この「良い授業」の要素には、学生にとって理解しやすく、教員の意図がストレートに伝わる、学生の中に問題意識を芽生えさせる、そして教員自身が「乗れる」=楽しいということが含まれるはずである。社会福祉援助論を扱う授業は、教員自身が援助方法やその過程を「知る」とともに「感じて」いなければ伝わらない。おそらく、筆者自身が「感じる」過程で出会った作品を媒介として伝える作業がある程度行われたために、「乗る」ことができ、また、学生も「反応」してくれたのではないかという点を説明する。

3 結果

(1) 授業の構成と内容

同じ教材を使い、類似の構成となっはいるものの、2000年と2001年では現場の実践例として紹介した内容や話の運びにやや違いがあり、2001年の講義は、もちろん前年の反省内容を反映したものになっている。よって、構成は、2001年のものを中心に記述する。

まず、学生に対し、先に結論を示す。それは、①カウンセリングマインドが大切だ、②システム論的なものの見方をしようの2つである。これらについては、その場では細かな説明は加えず、明言して、板書するにとどめる。その上で、想定としての援助の構図を「私が誰かを援助すると、事態が改善して、その人が喜ぶ。私も嬉しい。」と設定し、提示する。これは、おそらく対人援助ということに関して初心者が漠然と抱くイメージであると、数年の教育経験を通じて受け止めてきたためである。また、同時にそうは単純に考えていない人に対しても思考の出だしをそろえてもらう意図をもって提示する。

次に、あまんきみこ作「きつねのおきゃくさま」を読み、設問に答えてもらう。あまんきみこは、1931年に旧満州の撫順で生まれ、敗戦後1947年に15歳で日本に引き上げた。そして、21歳で結婚し、後に日本女子大学の児童学科を通信教育で卒業した。その後、坪田譲治が創刊した児童文学の同人誌「びわの実学校」の同人となった作家である。処女出版の「車のいろは空の色」がベストセラーとして読みつがれているほか、小学校の国語の教科書に多くの作品が掲載されている。「きつねのおきゃくさま」は、小学校2年生の教科書に載っている作品である。ここで、あまん氏ご本人に許可を得て転載させていただいた物語を配り、教員が音読する。（資料1参照）

設問は、①きつねは、いつ動物達を食べるのを

やめることにしたのか。または最後まで食べるつもりだったのだろうか。②きつねは、なぜくろくもやまのおおかみと全力で戦ったのだろうか。③きつねは、なぜ恥ずかしそうに笑って死んだのだろうか。の3つで、約10分程度実際に考え、書きとめる時間をとる。その後、説明ではまず、①は、1) 3匹目がやってきた後、2) 最後まで半々の思いだった、結果的には食べられなかったが、本当は食べる気でいたなどの例をあげ、要は、国語的に読み取りうる答えの他に、きつねの「邪悪さ」が最後までなくなっていない方向の回答もあり得ると示す。しかし、それでも小動物たちがケアされ、守られた事実には変わりがないことを投げかけるのである。「事態を良くするために特定の人を改心させる必要はない。なぜなら価値観は相対的だからである。私が信じていることを相手に強要することはできない。」と結ぶ。価値観の相対性については、もちろん許容範囲に限度はあるということも補足する。②についても同じように、1) 大事な3匹を守るため、2) 食料をとられないためという両極端な回答の例を示し、やはりどちらをとっても3匹が守られたという結果は同じであると提示する。ただ、いずれにしても、守られた側の心により、きつねは癒され、変わった・・・かもしれないと結ぶ。ここで、相互作用とか、円環的循環の説明をする。つまり、「変わった」きつねの「良い対応」で3匹がまたさらに良くなるといった状況である。しかし、ここで肝心なのは、前述の「かもしれない」の部分である。つまり、小学2年生の国語教育の視点から見れば、きつねは最後に改心して死んでいったのであろうが、しかし、現実はそのなにもきれいなものではなく、人は、もっと矛盾撞着した存在ではないかという投げかけである。次に、③の回答は①、②の結果によって様々であろうと伝える。教員の側からきつねの気持ちの例示として出したのは、

次の2つである。1) 君達を誤解させたままだったね。本当はほくはやさしいきつねなんかじゃなかったんだ。実は、君達を食べようと思っていた。でも、全力で君達を守れて幸せだったよ。有難う。2) ほんとは君達を食べつもりだったのにこんなことになっちゃって、ほくってドジだったよ。あーあ、あほらしい。

次に、結論を導くための問を次のように立て、説明と例示を加えてゆく。1つ目は、「援助」するとはどういうことか。しようと意図して必ずできるものなのか。そもそも最初に設定した援助の構図はあっているのか、である。ここでは、障害のある人の例で、いくつか説明する。障害特性などを知らずにおせっかいをして、結局迷惑をかけてしまう例や、また、専門職には心開けない人が同じ課題と向き合う人たちのセルフヘルプグループで変わって行く例などである。さらに、物語のきつねのように、もともと食べる気だった、つまり敵対者の位置にいたのに、結果として援助してしまうようなことがある話も加える。

2つ目は、誰が誰を援助する？である。物語で、きつねは小動物を援助するのみならず、自らも小動物たちに援助されていた。ここでは、援助する側が実は、援助できると感じる状態にもたれかかり、相手のいわゆる「問題行動」を維持、助長してしまう「共依存」の説明をする。よく言われる例としての、アルコール依存症者を含む家庭における「飲んだくれのおとうちゃん」と「けなげに世話する妻」の話しを出す。また、映画のシックスセンス³⁾を例にして、援助関係の主体と客体は思うより複雑であることを説明する。

3つ目は、援助するって難しい？で、初心者が陥りがちな姿勢についてふれる。相談関係は、「黙って座ればびたりと当たる」世界ではなく、広い意味の「きく」姿勢が重要であるという話である。これは主にカウンセリングマインドの説明

となり、人は、基本的に他人から理解されたい、暖かい関係を築きたいと思っている存在であることを強調する。ここでは、宿題をせずにテレビを見ているわが子に対する親の反応2パターンを創作し、一人芝居で学生に見せた。パターン1は頭ごなし型、パターン2は共感型である。⁴⁾

4つ目は、「犯人は誰？(原因は何?)」という問は正しいか？という問で、ここでシステム論的な物の見方を説明する。システムを「あたかも関連しあっているように見える物事の集まり」⁵⁾と定義し、犯人探しは直線的な因果論であること、枠のかけかえ(リフレーミング)をして、とがめだて抜きに状況を変えようという話をするのである。ここでは、筆者が障害児者福祉の現場実践で実際に経験した例をいくつか盛り込む。⁶⁾

5つ目、最後が援助するって素晴らしい？である。ここまで、さんざん援助関係の一筋縄ではゆかないことの説明をするので、最後で、しかし援助活動は素晴らしく、面白いというセールスを一気に行ってしめる。ここでは、筆者自身の実践活動における失敗談をあえて開示する。うまく行かないことは多いが、しかし、多くの部分については修正がきき、相手と自分の「良かれ」に結びついてゆくものであること、また、うまくゆかないことそのものをどうとらえるかを、それぞれの状況の中で見つめることが興味深い作業であることを語るのである。

(2) 学生のリアクション

1) 設問への回答

学生からのペーパーを集計したところ、設問①への回答は、「きつねがひよこに出会ってやさしいと言われたとき」から、「おおかみがやってきたとき」までの時系列の各ポイントに少しずつ位置づいていた。(表1参照)特にこの最初と最後の時点を回答した人が多く見られた。ただ、これら

はすべて、文章記述から読み取った答えであり、例えば、最後まで食べる気だったとした人も、きつねの心の矛盾撞着を表現しており、また、どこかのポイントを答えても、徐々に変化した過程を書く人が多くみられた。

設問②への回答は、両年ともに圧倒的に「小動物達を守るため」と答えた人が多かった。ただ、なぜ守るかのニュアンスに違いが見られ、「ひよこ達の信頼により、本当にやさしいきつねに変わったから」というもの、「小動物たちの信頼を裏切りたくない」、「かみさまみたいな・・・といってくれる仲間を失いたくない=もっと言ってほしい」などが表現されていた。愉快な例を二つあげる。「正義は勝つって感じかなあ。きつねの邪心にひよこことあひるとうさぎの信頼がせり勝ったのだと思う」「かみさまみたいといわれて、かみさまは、その下々のことを救ってやるという義務があると思ったから」。

設問③への回答では、キーワードとして「恥ずかしい」が圧倒的多数を占め、「嬉しい」「照れくさい」が次に並んでいた。「恥ずかしい」の理由は、当初食べようとしていたことそのもの、誤解させたままだったため3匹からの感謝に値しないという自覚、といった内容が多く、これは照れくさいの理由にもなっている。「照れくさい」の理由はほかに柄にもなく良いやつになってしまった自分に対して、というものもあった。「嬉しさ」の理由は3匹を守り通せたことと、感謝されたことへの思いがほとんどをしめた。これよりやや数は減るものの、当初食べようと考えていた3匹を結局守ることになった結果に「皮肉」を感じて、という回答もあった。

2) リアクションから見る自己評価

筆者が意図した事項を次のように整理し、学生のリアクションの中から読み取れるか否かをカウントした。(これらは、代表的なものをすべて資

料2に項目別に記載した。) 1つ目が、一種、否定するために提示した「援助の構図」は否定されたか、結果、援助が存外複雑な作用により成り立つことをいねいに表現する例が1割程度見られた。

2つ目は設問に関する「種明かし」(=きつねが改心しようとしまいと結果は同じ)は納得されたか、で、これは最初から結論を明確に言い切ったせいもあり、約1/3の学生が何らかの形で肯定した。この内容は、本講義の中心であったため、学生からの反応も賛否両論含めて見るべきものが多く、資料2の15～27までを占めている。17は、「一つの物事を固定的に見ない」という伝えなかったことのポイントをよくとらえているのがわかる。23、24、は、「気持ち」が伴わずに援助してよいのかと抗議している。また、27は、「読み取れること」と「考えられること」は別だ、として筆者の解釈にやはり抗議している。上述の「きつねが改心してもしなくても結果は同じ」はあくまでも「価値観を変えようが、変えまいが・・・」のメタファーであったはずである。つまり、「食べようとして」と「守ろうとして」の両極端をそのまま事象として認めているわけではないのであるが、しかし、特に2000年度においては説明不足の感があり、それが学生からの反対意見に反映されている面があるととらえた。つまり、「何を」「何に」見立てたかについては、さらに厳密な説明が必要なのである。この点については考察で詳述する。そのような説明不足があったにもかかわらず、25、26では、その不足も自ら補って、筆者の意図するところを正確にくみとっているのがわかる。

3つ目は、援助職は難しいが面白いというセールスは成功したかで、約1割の学生が新たな興味対象として援助分野をあげた。これは、資料28～32のあたりで表現されている。

最後4つ目は、授業は「面白い」という評価を受けたかで、結果、「面白かった」「興味深かった」「楽しかった」という表現語句の含まれるペーパーが約6割を占めた。これは、我田引水になるので、あえて資料に載せなかった。ここでは、面白かったかどうかの評価をするようにといったわけではなく、単に感想をといっただけの学生が面白さを記載することは、少なくとも、筆者の担当する他科目の経験と比べて、見るべきものがあると評価した。

4 考察

(1)「児童文学」を「メタファー」としたこと
筆者が、「きつねのおきゃくさま」に出会ったことは、援助論教育のためと意図した素材探しの目的がはじめにあったわけではない、という点において偶然である。しかし、一方、援助論教育に携わる「一人の全体」としての筆者に多大な影響を与え続けている「親業」⁷⁾=子育てを通して出会ったという意味では一種の必然性がある。たまたま出会ったその物語がなぜ筆者の心にとどまったのかを解明する作業によって逆に「児童文学をメタファーにすることが正しかったか否か」の間に答えることができると思う。

「きつねのおきゃくさま」は、筆者の長女が小学校2年生の時に国語の教科書で学んでいた作品である。長女が毎日取り組む音読の宿題を通じて親子でその作品に親しみ、内容を語り合ううちに、自らの分野にあてはめでの考察が深まっていった。筆者にとって、日常接する様々な事象が自らの専攻する分野の原理や原則を象徴するものと感じられることがしばしばある。⁸⁾そのような中でもこの「きつねのおきゃくさま」は特に強く惹かれる要素のある事象としての「物語」であったといえる。それはなぜであろうか。

おそらく、筆者は、「きつねのおきゃくさま」

にまずは「親子関係」を読み解いたのである。きつねを「親」、小動物達を「子」と見立ててみると、初期の親子関係におけるある真実を表していると感じないだろうか。無力に見える赤ん坊の笑顔が実は多大な力を持ち、それによってコントロールされ、突き動かされるように世話してしまうことは多くの親が体験するであろう。そして、さして立派な人間でもない自分を、疑うことなく慕ってくる存在が徐々に自らを変えてゆくことも日常である。親と子も一種の援助者、被援助者関係を取り結ぶ存在といえる。とがめ立て抜きに相手を理解しようとするカウンセリングマインドも大いに適用可能な世界である。⁹ その認識が、援助関係一般にあてはめでの理解に広がっていった。

本作品は、まずは音読を通じて耳から親しんだ。「語り」にぴったりの昔話の型を持ってそこにあったことも縁であろう。昔話は、伝承文学の1つで、児童文学の中でも5～8歳程度を対象とする幼年文学の源と言われている。¹⁰ この年代の文学は、語りまたは読みによって耳から伝えられるという特徴を持つ。よって、幼年文学はテーマや筋がはっきりしており、特定のリズムや繰り返しの構造を持って無駄のない展開をするといった特長がある。¹¹ 音読を通じてそれらの特長があますところなく生かされ、しかも様々な読みが可能な象徴性の高い文学としてまとまっていた。

「きつねのおきゃくさま」は、上述した幼年文学の特長を備えつつも、あまんきみこの作品群の中では、やや異色のものといわれている。教科書に掲載された作品のみ見ても、あまんのものは、小学校1年～5年までにわたって、2000年段階で13作品がある。¹² 「きつねのおきゃくさま」は1984年にサンリードから出版されたもので、教育出版の教科書が1992年より採用している。通常、幼年文学では悪い人、良い人がはっきりしているか、または悪い人が心を入れ替えて良くなるという構図

を持つことが多い。しかし、この作品では、最後まで、きつねの真の姿はあいまいのままである。¹³ 全体を通じて、ユーモラスでいながらペーススが漂うところにその異色性が出ているといわれている。短いながら、複雑で奥の深い作品であるといえる。

そもそも児童文学は、こどものための「お子様ランチ」などではないといわれる。何かを訴えたり啓蒙したりすることが一義的にあるわけでもない。読む楽しみに浸り、別の人生を経験するためにある。¹⁴ それを通じて結果としては後述するような人間認識を持つことになろうともである。それは、大人になること、つまり常識を身につけることによってむしろ見えなくなる「自分の生きている世界の意味」や「人間の本質」について、おとなと子どもの両方の心を持てる作者達、言い換えるなら子どもの目でものを見つつ、かつ伝達可能な言語表現にたけた人々によって書き表されたものである。よって、大人と子ども両方にとって意味のあるものといえる。河合は、現実の多層性を見ようとするとき、児童文学がいかに優れたものであるかを語っている。¹⁵

あまんきみこの現代児童文学における位置付けも押さえておかなければならない。あまんは、前述の通り、旧満州で生まれ、15歳までそこで育っている。戦争はあまんの作品に影響を与えており、空襲や植民地を題材にした作品がいくつかある。日本で児童文学を支えた代表的な人々の中で、坪田譲治が1963年に同人誌「びわの実学校」¹⁶を創刊した。その同人として活躍してきたのがあまんきみこである。坪田譲治は、小川未明や浜田広介らの童心主義の流れをくみつつも、作家の理想とする素朴で美しく、ロマンチックな子どもではなく、みずみずしい生命を持つありのままの子どもを描く「子どもの四季」で1938年、作家の地位を得ている。¹⁷

総じて、児童文学そのものの持つ力に引かれ、さらに現代児童文学の支え手の一人であるあまんの、特に異色といわれる作品「きつねのおきゃくさま」にひかれたのである。自らの親業体験と障害児者福祉の現場実践体験が「きつねのおきゃくさま」を媒介に「一人の全体」としての筆者の中で統合され、援助論教育の実践へとつながったといえる。そうした、体感したこととのかかわりで出会えた素材を通じて伝える作業は楽しいものであり、それが「乗り」を生み出したといえる。ただ、ここで断っておかねばならないのは、特に子育て体験が援助論教育にプラスにのみ働くといっているわけではないことである。人は親になることで、見えるようになることと、かえって見えなくなることの両方を得るのである。¹⁸⁾ 筆者個人にとって子育てを通して出会ったこの作品が意味を持つと述べているだけで、援助論教育に子育てが必要であると言っているわけではないことを明記しておきたい。

(2) 「きつねのおきゃくさま」にシステム論の見方を読み解くこと

筆者が1年生に対して伝えようとしていることは、そんなに複雑なことではない。それは、特定の要素を固定的に見て、問題児、問題者などと決め付けないこと、人間関係における相互作用をとらえ、問題状況をどう変えてゆくかという視点を持つ、というソーシャルワークの基本的視点の強調である。こうした内容を「きつねのおきゃくさま」に読み解くことは果たして正しかったであろうか。

そのことを考えるために、逆に同作品が小学校2年生の国語の授業ではどのような教えられ方をしているのかを見る。西郷によると、国語の授業は、文章や表現のあり方をわからせることや、文章そのものを楽しむことと並んで、人間認識を育

てるものである。¹⁹⁾ 佐々木による同作品を使った授業の実践記録によると、①場面が変わっても、繰り返されるきつねやひよこの言動を類比する、②きつねとひよこの関係を対比したり、その言動と自分たちの考えを対比したりする、③きつねやひよこの言動を理由付けて考えて言うなどを通して、人間認識としては、「人は、やさしいといわれたり信用されたりすることでその期待に応えようとしてかわっていけるものである」という内容を育てるとしている。²⁰⁾ 現に、一人の児童が授業の過程で、「自分がたたかわなかったら、せっかく太らせたのに食べられなくなる。」と表現していたものが、まとめ読みの段階で「最後は心が変わった」と意味付けを変えたことをプラスに評価している。つまり、これらを通じて、人を信用することの重要性や人との関係はいいもの、暖かいものであるという人生の土台を築く人間認識を教えているといえるであろう。

2年生に対しては当然といえるこうした人間認識の土台があってこそその「ゆさぶり」が今回授業で展開した内容である。小学生も5年生くらいになると文章に書かれていることが「こうも読める、ああも読める」という、いわゆる矛盾をとらえた読みが可能になると言われる。そこから何年も経過した大学1年生に投げかけたのは、人の心の矛盾撞着や、暖かいだけではだめなのだということ、私にとって良いことが他人にとっても良いとは限らないという問題意識であった。西郷は、ファンタジーの教育的価値を記した文章の中で、「思いやり・やさしさというのは想像力と同じです。(中略)相手の身になれる、自分とは違う人間の気持ちになれる、その人間の立場に立てるということは想像力です。」と言っている。²¹⁾ 筆者の授業がこの根本を少しでも否定しただろうか。「相手の身になる」とは、まさに自分とは全く価値観の違う人の思いを想像できることに他ならない。

「良いこと」とか「良くなる」とは万人にとって一つの固定したものではないということを伝えなかった。

(3) システム論の見方と社会福祉の価値の関係

社会福祉の専門職が純然たるもうけのためにのみ援助の仕事をしてかまわないと伝えた覚えはないが、しかし、一部の学生からはそのようにとられてしまっている。それは、「食うために育てる」と「家族または仲間として慈しんで育てる」の両極端は価値観の違いの「見立て」であると強調し足りなかったのではないだろうか。筆者がここで問題にしている価値観とは、個人個人が持っている、簡単にその是非を決めることの出来ない処々のことである。例えば、「男は妻子を責任もって養うべきである」「女は男につき従うべきである」「長男は親をみるべきである」「結婚前にセックスをしてはいけない」「母親は子どもが3歳になるまではそばにいて育てるべきである」などなど。「生命を大切にする」といった、そこをはずしては元も子もないような話をしているわけではないにもかかわらず、きつねの例が取って食うか、守るかという話であったために極端な見立てをするという誤解を招いたとも考えられる。

ただ、「もうけのために福祉の仕事をする」ということも確かに一つの価値観ではあろう。しかし、これを言い換えると「労働条件の良い福祉の仕事につく」という表現にもなる。我々が社会福祉職の資格制度を確立し、より社会的な地位の高い仕事にしようと努力することはここにもつながるであろう。それが利用者の益につながることも明白だからである。また、昨今の権利擁護運動で言われる、「援助における明確な基準を示し、やる気のある職員の、より良い取り組みに正当な評価（給与面や人事）を与えるべき」といった提言

もこれと関連する。すなわち、個人の倫理観を高めると同時に、倫理観高く、がんばればがんばるほど仕事が増えるといった矛盾を解消するためのシステム面からのアプローチがそれである。

価値観との関連でさらに言うと、近年、社会福祉が特に大切にしている「自己決定」であるとか「地域でのその人らしい生活」、「障害や加齢の別にかかわらない、できる限りの自己実現を」、などとおりあわない他人（特に被援助者やその家族）の価値観に直面したとき、援助者の立場として葛藤があることは事実であろう。この点に関しても、まずは援助をしてゆく過程で、無理やり相手の価値観を変える必要はない、変えようとしても無理である、相手の土俵に乗っかって、相手自身で変わるのを見守るためにもシステム論的なものの見方は大切であり、有効であると伝えることになる。ただ、この内容が学生にとってさらに説得力を持つには、そのような観点で取り組む支援の実践例を豊富に語る必要があるであろう。

5 おわりに

社会福祉学科に入学した学生の「対人援助」への姿勢や距離とは、これを偽善などに関連づけて引いてしまう、「引き系」から、是非とも人の役に立ちたい、現に立っている、立てるのだという「入れ込み系」までの連続線上の様々な場所に位置づくと考えられる。これらの姿勢に対する一種の中和剤として、今回メタファーを投じたことの効果は一定程度あったのではないかと考えている。「きつねのおきゃくさま」については、一回完結の授業に使うには最適の分量と形態、内容の奥深さを兼ね備える、優れた作品であったこと、筆者が体感した援助活動が投影されていたことの両者により、乗りのある授業を展開することができた。

ただ、前述のように、「やさしさ」や「暖かさ」

といった心が大切であるとする観点と、さしたる人格者でなくとも、システムを整える中で、まともな援助はいくらでもできるとする観点のバランスについては誤解をまねきやすく、さらに丁寧な説明を要することがわかった。「やさしさ」「暖かさ」がむしろ価値観の押し付けや、優位に立った援助を呼ぶおそれにつながるという点を理解することと「自分の利害のみ考えて援助してよい」と受け取ることは別話である。

また、その人が発達上のどの位置にいるのかということは重要な点である。困っている人には駆け寄って手を差し伸べる、という普通の人格教育があってこそその本授業展開である。ということは逆に、筆者は、大学の1年生は基本的な人格形成が終わっており、総じて一定の常識とやさしさを備えている人々と考えていることに気づく。しかし、学生の中にも様々な状況の人がいることを考えれば、本授業のような取り組みは、ややもすると素直な善意を打ち砕くことになりかねないことを自覚した。「例え話」は「面白い」だけに、その使用と説明に慎重を期するとともに、学生のリアクションを丁寧に検討して、場合によってはフォローアップすることが必要であると考えている。今回、現に抗議のリアクションをよせてくれた学生の何人かと個別の話し合いを持った。授業に参加し、筆者の投げかけを受け止めて熱心に考えてくれた学生の皆さんに感謝したい。

また、あまんきみこ氏は、筆者が作品転載の許可を得るために送った手紙に対し、次のようなはがきを下さった。「・・・きつねのおきゃくさまがこのような形でお役にたてるようでしたらうれしいことです。きつねたちもどんなにかよろこぶことでしょう・・・」記してお礼を申し上げたい。

(註及び引用)

- 1) 瀬戸 1995 p69
- 2) ここで言う援助論教育とは、本学科におかれた科目のうち、1回完結の基礎演習、社会福祉援助技術演習、社会福祉現場実習、筆者の担当する社会福祉演習（3-4年のゼミナール）など、社会福祉援助について取り扱う科目一般の内容を総称するものである。
- 3) ブルース・ウィリスとハーレイ・ジョエル・オスメントの演技で話題を呼んだこの作品は、援助関係の妙味を語るためのメタファーとしても最適であると考えられる。主人公マルコム・クロウが児童精神科医として、フィラデルフィア市長より優秀功労賞を受けた現実とそれでも治療に失敗した（援助できなかった）子どもはたくさんいる現実の対比、もう一人の主人公コール・シアーを治療しよう（援助しよう）と親身に働きかけるその構図が最後に大逆転する運びに、「援助関係」の難しさと素晴らしさを読み解いた人は多いのではないだろうか。
- 4) (頭ごなし型)
(9時になるころ、テレビを見ている子どもに向かって)
父：おい、もう9時になるけど、宿題は済ませたのか？風呂もまだだろう。
子：えー。まだけど・・・。
父：だめじゃないか、さっさと済ませなさい。
子：何だかやる気がしないんだ。量が多すぎるし、むつかしくて。
父：難しいからってやらなければ、ますますわからんだろう。逃げてちゃだめだよ。もう5年生なんだから、しっかりしなさい。
子：・・・。

(共感型)

父：おい、もう9時になるけど、宿題は済ませたのか？風呂もまだだろう。

子：えー。まだだけど・・・。

父：何だか気が乗らないって感じだな、どうしたんだい？

子：この間のテスト悪かったんだ、がんばったのにさ。

父：どれ、持って来てごらん。

子：(持ってくる)

父：こことここ間違ったんだね。頑張ったのに、がっかりしたのか・・・。

子：うん。

父：なるほど・・・。それで宿題はどうする？

子：やろうとは思うけど量が多すぎるし、難しくて・・・。

父：じゃあ、とにかく出来るところまでやって、明日じっくり相談しないか。本当に量が多すぎるのか、それとも時間のやりくりで何とかなるのか一緒に考えてみようよ。

子：わかった。

5) 東 1993 p4

6) この中のひとつは、「障害分野の事例」として、2001年度後期開講の社会福祉援助技術演習Ⅱにおいて取り上げた。身体障害者更生施設において、特定の利用者と他の利用者集団の板ばさみになるソーシャルワーカーについて表現した。

7) ゴードン 1998

8) 例えば、ベストセラーになった鈴木光司の三部作「リング」「らせん」「ループ」の3作目「ループ」がある。「ループ」では、ループ界が山村貞子の自己増殖により単一の遺伝子に収斂されていくことによって、転移性ヒトガンウイルス増殖の直撃を受け、

滅亡に向かうというストーリーがあり、そこに「多様性を認めない社会は弱くもろい社会である。」という思想を読み取り、実際、障害福祉論の授業で紹介した。

また、宇多田ヒカルのIn My Roomの歌詞に障害構造論を読み取り、基礎演習で紹介した。

9) トマス・ゴードンの「親業」は親子関係のルールをいくつか提言している。それを翻訳し、日本においても親業訓練講座を主催しているのが近藤千恵である。そして、「受容のメッセージ」「能動的なききかた」「わたしメッセージの使用」「勝ち負けなし法」など、親業訓練の真髄はカウンセリング・マインドである。

10) 三宅 童話と幼年文学 三宅興子・多田昌美 1999 p84

11) 岡田 1983 p10

12) 三好修一郎 小・中学校教科書掲載 あまんきみこ作品の変遷 文芸教育79 2000 p89～95

13) 筆者は、作中人物の心情その他について作者に問うことそのものがお門違いだと考えている。しかし、とりあえず、あまんきみこ自身が対談の中で、「このきつねは、別に心を入れ替えたわけではないですよねえ。」という問に対して「非常に曖昧。」と答えていることを記しておく。

あまんきみこ+西郷竹彦 対談あまんきみこの世界 文芸教育79 2000 p29

14) 上野 児童文学はお子様ランチか？ 今江祥智他 1998 p52～67

15) 河合 なぜ子どもの本か 河合隼雄 1990 p6～27

16) 坪田譲治が「びわの実学校」を創刊したのは1963年であり、82年の譲治の永眠後も続

けられ、86年に134号をもって終刊した。同年10月に同人によって「季刊・びわの実学校」が発足し、94年30号をもって終わる。3年の空白後、1997年「びわの実ノート」が創刊された。編集長が松谷みよ子、同人メンバーは、あまんきみこ・今西祐行・沖井千代子・砂田弘・高橋健・寺村輝夫・前川康男・松谷みよこ・宮川ひろの9人である。

松谷みよ子 「びわの実ノート」とあまんさん 文芸教育79 2000 p6~7

- 17) 西本 坪田譲治・リアルな目で描く童心の世界 1983 p54~64
- 18) 宮子あずさ 親が憎い……。だから何？ 宮子あずさ 2001 p34
- 19) 西郷竹彦 ファンタジーにはどのような教育的価値があるのか 文芸教育79 2000 p63
- 20) 佐々木智治 二年「きつねのおきゃくさま」の授業 文芸教育79 2000 p107~117
- 21) 西郷竹彦 前掲書 p56

(文献目録)

- 1) フォン・ベルタランフィ著 長野敬、大田邦昌訳 一般システム理論 みすず書房 1973
- 2) 文芸教育79 あまんきみこを授業する 2000 No.2 明治図書
- 3) ジム・デフェリス著 酒井紀子訳 シックス・センス 竹書房文庫 1999
- 4) トマス・ゴードン著 近藤千恵訳 親業 大和書房 1998
- 5) 東豊 セラピスト入門 日本評論社 1993
- 6) 今江祥智 上野瞭 山下明生著 宝島へのパスポート 開放出版社 1998
- 7) 今村仁司編 現代思想を読む辞典 講談社

現代新書 1988

- 8) 河合隼雄 子どもの本を読む 楡出版 1990
- 9) 河合隼雄 物語とふしぎ 岩波書店 1996
- 10) 河合隼雄他 河合隼雄全対話7 物語りと子どもの心 1997
- 11) 宮川健郎 現代児童文学の語るもの NHKブックス 1996
- 12) 三宅興子 多田昌美著 児童文学12の扉をひらく 翰林書房 1999
- 13) 宮子あずさ つらい心への処方箋 ポプラ社 2001
- 14) 西本鶏介 子どもの本の作家たち 東京書籍 1983
- 15) 野村滋 昔話は残酷か 東京こども図書館 1975
- 16) 岡田純也 児童文学への誘い 1983
- 17) 瀬戸賢一 メタファー思考 講談社現代新書 1995
- 18) 新版国語 2上 教育出版 1998
- 19) 鈴木光司 ループ 角川書店 1998
- 20) 遊佐安一郎 家族療法入門 星和書店 1984

むかし むかし、あつたとさ。

はらべこきつねが 歩いて いると、やせだ ひよこが やって きた。
がぶりと やろうと 思ったが、やせて いるので 考えた。太らせてから
だべようと。

そうとも。よく ある、よく ある ことさ。

「やあ、ひよこ。」

「やあ、きつねおにいちゃん。」

「おにいちゃん？ やめて くれよ。」

きつねは ぶるると みぶるいした。

でも、ひよこは 目を 丸く して 言った。

「ねえ、おにいちゃん。どこかに いい すみが ないかなあ。こまってるんだ。」

きつねは、世の 中で にやりと わらった。

「よし よし、おれの うちに きなよ。」

すると、ひよこが 言ったとさ。

「きつねおにいちゃんって やさしいねえ。」

「やさしい？ やめて くれたら、そんな せりふ。」

でも、きつねは、生まれて はじめて「やさしい」なんて 言われたので、少し ぼうつと なった。

ひよこをつれて 帰る とちゅう、「おととつと、おちつけ おちつけ。」

切りかぶに つまずいて、ころびそうに なったとさ。

きつねは、ひよこに、それは やさしく だべさせた。そして、ひよこが「やさしい おにいちゃん」
と言うと、ぼうつと なった。

ひよこは まるまる 太って きたぜ。

ある 日、ひよこが さんぽに 行きたいと 言い出した。

——はあん。にげる 気かな。

きつねは、そうつと ついて いった。

ひよこが 春の 歌なんか 歌いながら 歩いて いると、 やせだ あひるが やって きたとさ。

「やあ、ひよこ。どこかに いいすみかは ないかなあ。こまってるんだ。」

「あるわよ。きつねおにいちゃんちよ。あたしと いっしょに いきましょ。」

「きつね？ とうんでもない。がぶりと やられるよ。」

と、あひるが 言うと、ひよこは 首を ぶった。

「うらん。きつねおにいちゃんは とつても 親切なの。」

それを かけて 聞いた きつねは うっとりした。そして、「親切な きつね」と いう ことばを、
五回も つぶやいたとさ。

さあ、そこで いそいで うちに 帰ると、まって いた。

きつねは、ひよこと あひるに、それは 親切だった。そして、ふたりが「親切な おにいちゃん」の 話を して いるのを 聞くと、ぼうっと なった。あひるも まるまる 太って きたぜ。

ある 日、ひよこと あひるが さんぽに 行きたいと 言い出した。

——はあん。にげる 気かな。

きつねは、そうと ついて いった。

ひよこと あひるが 屋の 歌なんが 歌いながら 歩いて いると、やせた うさぎが やって きたとさ。

「やあ、ひよこと あひる。どこかに いい すみかは ないかなあ。こまってるんだ。」

「あるわよ。きつねおにいちゃんちよ。あだしたちと いっしょに いきましょう。」

「きつねだって？ とうんでもない。がぶりと やられるぜ。」

「うろん。きつねおにいちゃんは かみさまみだいなんだよ。」

それを かけて 聞いた きつねは、うっとりして きげつしろうに なったとさ。

そこで、きつねは、ひよこと あひると うさぎを、そうとも、かみさまみだいに ぞだてた。そして、3人が 「かみさまみだいな おにいちゃん」の 話を して いると、ぼうっと なった。

うさぎも まるまる 太って きたぜ。

ある 日、くろくも山の おおがみが 下りて きたとさ。

「こりゃ、うまそうな においだねえ。ふん ふん、ひよこに あひるに うさぎだな。」

「いや、まだ いるぞ。きつねが いるぞ。」

きつねは とび出した。

きつねの 体に、ゆうきが りんりんと わいた。

おお、たたがったとも、たたがったとも。

じつに、じつに、いさましがったぜ。

そして、おおがみは、とうとう にげて いったとさ。

そのばん。

きつねは、はずかしろうに わらって しんだ。

まるまる 太った、ひよこと あひると うさぎは、にじの森に 小さい おはがを 作った。

そして、せがいー やさしい、親切な、かみさまみだいな、そのうえ ゆうがんな きつねの ために なみだを ながしたとさ。

とつびん ばらりの ふう。

(教育出版 新版国語 2上、P52～60。あまんきみこ氏本人に了解を得て転載)

資料2

学生のリアクションから

(学生に了解をとって掲載)

項目

- ① 否定するために提示した「援助の構図」は否定されたか
- ② 設問に対する種明かしは納得されたか
- ③ 援助職は難しいが面白いというセールスは成功したか
- ④ 授業は「面白い」という評価を受けたか

(カウンセリングマインドの関連)

1. 人が変わるためには、ひととのコミュニケーションが必要なのだと思いました。「きつねのおきゃくさま」のきつねも、ひよこたちとのコミュニケーションでかわったのだと思います。(2000)
2. 私たちは、人とのかかわりなくして生きていくことはできない。その人間関係をうまく築きたいと誰もが願っているだろう。しかし、なくてはならない人間関係の中で悩んだり、トラブルを招いたりすることがある。機械のように説明書通りにいかない。目に見えない。壊れやすくて、取り扱いが難しいものであると感じる。その反面、私は人間関係に支えられているし、そこから学ぶことも多い。実際にある友人との出会いが私の考え方に影響を与えたことがあった。人は一人で生きていくことはできない。人は人とのかかわりあいの中で成長していく。この授業で改めて強く感じた。(2000)

(カウンセリングマインド+①の関連)

3. この話を読んで「人を助けると自分もうれしい」の意味がよくわかりました。また、同時にきつねは3人に身体的なケアをされたわけ

じゃないけれども、今まであった邪悪な心を取り除くという心のケアをされたと思った。(2001)

4. きつねのように、実際援助するつもりはなくても相手を救い、また自分も助けられるということもあれば、相手を助けてあげたくても助けられないこともあるところが援助することの魅力であるとも思った、ひよこの「きつねおにいちゃんってやさしいねえ」の一言は、ひよこに援助するつもりはなくても、どれだけきつねを援助したかはかり知れない。この会話でやさしい気持ちを持ち、相手にとって批判的な態度をとるのではなく、その人の話に共感する態度で接することが傷ついた人にとってどれだけ救われることか良く分かりました。(2001)

(①の関連)

5. 今まで、ボランティアとかしようと思っても、どうしても踏み込めなかったけれど、今日の授業で援助に対する考えかたを変えるきっかけを得た気がするので、ボランティアなどの実践の場で色々な経験をして、少しずつ援助に対する価値観を変えていきたいなと思いました。(2001)
6. 「援助」というと援助する側は、感情的になってしまうような気がしていたのですが、客観的に色々な角度から見て、相手の立場や状態、状況を考えてからしなければいけないのだとわかりました。(2001)
7. 援助に対する気持ちに不安を持っていましたが、誰もが悩むことなんだとわかって、ちょっと安心しました。きつねのような行動を取れるようになりたいなと思いました。(2001)
8. 援助は自己満足ではいけないと思うし、相手

の意図をくみとることは、福祉の分野以外でもとても大切であると思う。相手の意図をくみとることは本当に難しく、「くみとろうとした」だけではすまされないこともあるから、一生かかっても習得できないかもしれないが、きっと一生考えていきそうな気がする。(2001)

9. 今まで、援助というものは一方通行だと思っていました。できる人ができることをできない人のためにやってあげるという感覚がありました。けれども「きつねのお客さま」を読み、授業を聞いているうちにその考えが変わってきました。(2001)

(①および②の関連)

10. どんな考え方で接していたとしても結果は同じということは、納得はしたが、不思議にも感じた。それは、授業でやった想定としての援助の構図という「私が誰かを援助すると事態が好転して、その人が喜ぶ。私も嬉しい」という発想しか私にはなかったから。私はある人に以前「そういう考え方が強すぎると例えば重度の知的障害の方と接して、こちらが一生懸命やっても伝わらない時に、虐待してしまったりする危険があるんだ」と言われたことがある。「援助してあげる」という気持ちが強すぎても、逆になさすぎてもそれは援助に携わる身としては不適なのではないかと思った。(2001)
11. (前略) これを介護で考えると、最初介護する人は誰かの役に立ちたいという気持ちから始めるのだと思いますが、もしかしたら人からほめられたいという気持ちもあるのかもしれませんが。介護される人は、何で他人に介護されなければならないんだろうという気持ちもあるかもしれませんが、徐々にお互いを必

要とするようになっていきます。動機は何であれ、他人との交流を通し、相手を思いやり、最終的に成長できればいいのではないかとこの話を読んで感じました。(2001)

12. 今回の授業で一番心に残っている事は、物事を行う際に例えば人に支援をする際などであるが、それを行うという行為にとらわれがちであるが、結果によって後から行為に対する理解を得ることも出きるということである。何かと「行う」という行為に気持ちがとらわれてしまって私自身満足してしまうことがある。また、結果に向かっていくまでの過程の中での形、特に、美しくスムーズに物事を進行させたいと思うことやその物事に取り組む者がすべて善良な考えで行わなければならないと思っているところが私にはある。しかし、結果に結びつく過程の中ですべてがすばらしく進行することは実際には難しいことであり、そのすばらしく物事を進めるということも自己満足にしかすぎないのではないかと感じた。(2000)
13. 「経過」と「結果」って、何につけても難しい問題だと思う。他者を助けたとして、それがおせっかいだったら・・そういう話がでていたけれど、そんなことを言ったら何もできないと思う。結局、この世の中、結果良ければすべて良しなんだろうなあ。そりゃ、結果が良いに越したことはないけれど、経過が人間の価値を育てていくものだと思うから、経過も大切だと思う。きつねの話だって、ある経過を経て結果につながったわけだから。(2001)
14. 私がきつねが最後まで「えさ」としてひよこ達を思う心がほんの少しでもあったかもしれないと考えたのは、きつねを私に置き換えるならそこまで強くなれるかしらと思ったから

です。人の心の隅には、どうしても弱い部分があって、それを責めることは出来ないのではないかと考えたからです。もし、きつねが死なず、4人で幸福に暮らしていたとしても何らかの理由で食べ物がなくなり、4人とも飢え死にしそうになったとき、きつねはどうするのでしょうか？ひよこ達を食べず4人で仲良く死んでいくのでしょうか？先の先まで想像して、飛行機事故で遭難して、死んだ人を食べて生き残った人たちの話まで思い出して考えてしまいました。

それから「人に頼られること」「人に必要とされること」は気持ちのいいことであるという話も自分の中で思いあたることがあり、自分を振り返りつつ人と接してゆく必要性を痛感しています。(2000)

(②の関連)

15. 人が変われば、状況が変わり、状況が変われば人が変わるということを考えさせられました。社会においてもその通りだと思いました。そして授業後半の介護する側とされる側の共依存についてはなかなか考えさせられるものがありました。自分の好意からした行為が実は自分の自己満足の世界になってしまっていたりするところなど、難しい問題だなあと思いました。(2000)
16. 援助をする人というのは人間的に欠点のない人というイメージを持っていたのですが、よく考えれば人間は二元論にあてはまらないし、先生の言うことはもっともだと思いました。自然と自分の中で福祉のことに対して固定的に思っていることがあるので、これから知識を増やし、柔軟に物事を考えていきたいです。(2001)
17. この話で実に興味深いのが、きつねの心理的変化です。私はこの学科に入ることを決めたのは、資格が取れるから、就職に有利だから」という安易な気持ちからでした。入学してからは案の定後悔する日が続きました。「自分は本当に福祉の道へ進みたいのだろうか、もう福祉の道へ踏み込んでしまったから引き返すことはできない・・・」とかなり落ち込んだこともありました。しかし、講義が進み、今まで知らなかった福祉について勉強していくうちに、今度は「もっと福祉について知りたい！人の役に立てる人間になりたい！」ととても勉強が楽しくなってきたのです。自分でも不思議なくらい私の心は180度転換しました。そんなことがあってか私はこのきつねにととても親しみを感じました。はじめはいいかげんな気持ちで入った福祉学科でしたが、今は心から福祉を勉強したいと考えています。(2000)
18. 私は介護をする時、偽善の気持ちはないとか、本当に純粹に社会福祉学科を選んだのかについて不安になることがあるけれど、この話を読んで、先生の話聞いて、どんな気持ちでいたとしても、介護をされる人の役には立っている、ということを知って安心した。(2001)
19. 援助というのは愛情が根底になければできないと思っていた。でも、今日の授業で援助をしていくうちに愛情が湧くということもあると気づいた。考えてみればカウンセラーやソーシャルワーカーなどが相手にするのは、ほとんど他人という場合が大部分。その人がどこでどう生きようが自分には全く関係ないとすらいえる。それでも、人を助けたいという思い、実際援助していくということは、人間という存在そのものに対する愛があるから

だと思う。(2001)

20. 今まで、「援助をする人は良い人だ」と思っていたけれど、人を守るためには別にそんなものは関係なく、しようと思えば誰だってできるものなのだというを感じた。(2001)
21. 小学校のころも国語の授業でこのようなことを考えたと思いますが、昔と今では考えることが違ってきていると思いました。小学生のころだったら純粋にきつねはひよこ達を食べるのをやめようと思い、最後には自分の命をも捨てて助けてあげたと考えていたと思います。しかし、今ではきつねは最後まで食べようと考えていたとかあまり良い方向に考えることもできなくなっている自分にすこし悲しくなりましたが、いろいろなことを考えられるようになったという考え方もあります。(2000)
22. きつねは、最後まで食べる気だったと私は感じた。(恥ずかしそうに笑ったから)しかし、おおかみと戦う場面を何回読んでも獲物をとられないために戦ったとはどうしても思えない。何だかとても矛盾していて変だと自分でも思った。私は心の底では「いいきつね」だと思っているのだろう。人が変わらなくても状況は良くなる。私は最初「えっ？」と思った。私はひよこ達が守られ、きつねに対する信頼も深まったという結果だけではなく、きつねは本当は「いいきつね」であることも求めていた。みんなが「いい人」になって「いい状況」になり丸くおさまり、笑顔で「良かった、良かった」ということを安易に考えていたことに気づいた。(2000)
23. 人が根本的に良くならなくても状況が良くなることはある。例えば、思いやりがなくても生活のために福祉で働き、人に援助する。援助された人は当然助かるということだ。しか

し、やはり思いやりを持って接した方が介護される人からするとうれしいだろう。ひよこは、きつねが本当は食べようとしていたのに分からなかった。最後まできつねを信じ続けた。人間は違うと思う。もっと他人の気持ちを察する能力があり、まして障害者や老人はもっと敏感に感じるのではないか。重度の知的障害者の兄でさえ、偏見を持っている人には近づいていかない。市役所の福祉課の人たちだって、親身になってこっちの言うことを取り合ってくれる人は少ない。そうなる、状況は良くなっていない。思いやりも大事だ。少なくとも私は思いやりを持った人間になろうと思った。

それと、これは私の考えすぎだろうが、実はひよこの方が頭脳明晰で、きつねを尊敬しまくり、たくさん感謝して喜ばせておいて、きつねの心をコントロールしていたかも、と考えてしまった。感謝の気持ちで人間の気持ちをコントロールできる。そう信じたい。(2000)

24. きつねの考えがどうであるにせよ、結果的にひよこたちの命は救われた。援助者が被援助者に対してどのような目的、意図で働きかけようとも、現象的には同じ結果がもたらされる場合があるようだ。きつねとひよこたちの関係が援助者と被援助者の関係にあてはまるということなのだが、被援助者にとって良い状況になれば、とにかくそれで良いということなのだろうか。(中略)たとえ働きかける方法が同じで、予想通りの良い結果が得られたとしても、援助者の姿勢が真に被援助者の立場に立ったものでなければ、いい関係を維持することは難しいのではないか。(2000)
25. 一つのことに対して様々な見かたを考えることはおもしろいと思います。けれどもそうす

るうちに、ふと、何を信じたらいいのかなあと不安になったりすることがあります。どうしてだろうと考えました。多分それは世の中のことが正しいことと、そうでないことに分けられたら楽かもしれないなあと心のどこかで思っていたからでしょう。でも、こうやって言葉にすると私ちょっと危ない人みたいですね。一つのことに対して様々な見方から考えることが大切なのは、それだけ、いろんな人がいて、一つのものさしだけでははかりきれないことが山ほどあるのだということなのでしょう。(2000)

26. 「人が変わらなくても状況は変わる」ということは、きつねの例にあてはめてみるとすごく納得できたけれど、この言葉は、なぜ私にはちょっとしたショックのようなものがあった。(中略) 私がショックを受けたといったのは、状況が変化する時に人の心情は全く関係がないのである、と言葉の意味をとらえ、人の心というのは現実にはうずまっているという、そんな寂しいものなのかと思ったからである。しかし、いろいろとお話を聞き、考えてみると、状況を良い方向にもっていくためには、まず人を変化させようとするのではなく、その状況を良くさせることを考える、そこには自然に心情の変化が伴うということを感じた。(2000)
27. 私が一つ疑問に思ったのは、先生は「読み取れること」と「考えられること」のどちらを考えているらっしゃるかということです。「考えられること」では無限の可能性がります。きつねは結局食べるために育て続け、獲物として守り、自嘲して死んでいくという最悪のケースも「考えられ」ます。しかし、一つ一つのことばの意味や役割を理解でき、「読み取れて」いればおのずとわかってくるでしょ

う。このケースにあてはめてはならないことが。文の解釈に「正しい答え」はありませんが、「ふさわしい答え」というものがあると思っています。(2000)

(③の関連)

28. この授業をうけて、人の役に立つことなんてできるものではないけれど、できるものなら福祉関係の専門職につきたいなあと思いました。(2001)

(①および③の関連)

29. 私は、一時社会福祉とは、人に善意をおしつけるようなものと、福祉サービスを受ける人の中に感じている人がいて、自分を受け入れてもらえなかったりすることがこの先あるんじゃないかと考えてしまったことがあったのですが、今日の授業でその不安の部分が消えたように感じています。(2001)

(②および③の関連)

30. 価値観の話には「ああ！そうか！」と思いました。つい最近、人との価値観の違いについてすごく考えることがあったので、相対的なものなんだ、と、人を改心させる必要はないという話で目の前のモヤがすっきり晴れた感じがしました。(中略)「援助」の方にあまり興味はなかったのですが、すごくやりがいがありそうだと、奥が深くて興味が湧いてきました。(2001)

(③およびカウンセリングマインドの関連)

31. 今回の授業の最後に「援助するってすばらしい？」という質問がありました。私もすばらしい！！と言いたけれど、なんだか見る人に

よっては偽善のように見えてしまう気がして、援助することの難しさも感じました。きつねのおきやくさまを読んでいると、ひよこのやさしい心によってきつねの心の変化が起こっていることに、人に対する接し方にもいろいろあって、答えなんてないから援助は本当に難しいと思いました。だけど、答えがないからこそ援助というのは自分も成長できる良いことだと思います。人の話がきける「きき上手」になれるようがんばりたいです。(2001)

32. 私は、社会福祉学科に入っておきながら、「援助」したいけど、したくない、という躊躇するような、おびえるような感じもまだ少し残っているのですが、今日の「援助するってすばらしい？」の中で「たくさんまちがいを起こすけれど、自分をふりかえりつつできる」というお話に勇気づけられました。(2001)

(④の関連)

33. 小学生の教科書を読むとき、援助論とつながっているなどとはもちろん考えずに読んでいて、今回、そういうことを念頭に置いて読んでみたら、本当につながっているんだなと感じました。「社会福祉」というものは日常のあらゆるところにあって、探そうと思えばヒントはどこにでもあるのだなと思いました。(2001)

(②および④の関連)

34. 「きつねのおきやくさま」は以前なにかで読んだことがあるが、改めて読んでみて、今回のように福祉の面から見てみると、とても興味深い話に感じた。どの講義でも私にとって新しい哲学的な思想が含まれているように感

じ、その思想が福祉の基本となるのだと感じている。今回の講義では特にそれを感じ、うまくいえないが「福祉とは～」というより「人間って～」を学んだように感じる。きき上手になろう、価値観は相対的だ、などこれらは福祉の面に限らず、私のこれからの友人関係、家族関係をより良くするものだと思う。(2001)

表1

問1 (きつねはいつ小動物を食べるのをやめたのか) への回答		
場 面	2000 年度	2001 年度
ひよこに「きつねおにいちゃんってやさしいね」と言われた	17 名	15 名
ひよこが丸々と太ってきた	2 名	2 名
ひよこが散歩に行きたいと言い出した	-	1 名
ひよこがきつねを「とっても親切なの」とあひるに説明した	12 名	8 名
ひよことあひるが散歩に行きたいと言い出した	1 名	2 名
2 匹がきつねを「かみさまみたい」とうさぎに説明した	7 名	14 名
うさぎも丸々と太ってきた	2 名	3 名
くろくも山からおおかみが下りて来て、きつねが戦う	23 名	36 名
最後まで食べるつもりだった	12 名	7 名
その他 (不明、決められない、はじめから)	6 名	3 名
計	82 名	91 名